

おはん（道行思案餘）

へ浮名を流す川水も 桂にあらぬ綾瀬川 月も臙に春の夜の 夢ばかりなる手枕を 結ぶ
帯屋の長右衛門 へ背を下せば流石にも 姿つくるふ振袖に 風のふくみてほら／＼と
空に雨持つ鐘の音も 九つこゝに北東 隅田に手繰の帆影さへ 明日待たぬ身の何かせ
ん 長命寺とも頼まれぬ世は牛島の浮世ぞとはかなき事をかこつにぞ へほんに思へ
ば昨日今日 まだ三味線の手ほどきも お前に習ひそれからが 御師匠さんへ生田流琴
や豊後の文句にも へみんな女子は一生に男といふは唯一人二人と肌を触れるのは
どんな本にも年々の 草双紙にも無い事を よう見て聞いて悪戯な 顔にも咲きし初花
は 杉田の梅の香も知らぬ へその江の島へ雪の下 あ石部屋で丁度マア 堅いお前に
合宿も弁天さんの引合せ それから旅の夢見草 へ初も見事なおつゞら馬よ蒲団重ね
て跡附けて お江戸上りのナア 二度笠ナアエ 縞さん紺さん中乗さん 遣つてかんせほ
うらんせ 知らぬ伊勢路を道もせも 覚めて内外の義理詰に

「コレお半 道々も言ふ通り 思ひ直してこゝから早う帰つてくれ
聞き分けてたもや

へお半はなんと泣いじゃくり 袖に涙を持ち添へて 顔打ち眺め長右衛門さん へなん
ぼ私が年が行かぬと思ふてからにお前許りが死なしゃんしてこちや やゝ産んで長ら
へて居らりょうかいなコレ申し そりや可愛いのぢやない憎いのぢや へ小さい時か
ら子心に 長右衛門さんが鼻負ぢやと言へばぢらして悪う言ふ そんなお人にや物言
はぬこれいなこれと取付いて 膝に涙の濡れまざる

「今死ぬる身乍らも せめては此癩 おさめてやり度いものぢやなア

へかくとは余所に白髭の 鳩へかへる目なし鳥 へ手引きもいらす女房も 持たぬ出居
衆の気散じは 屋根代出せば家主へ へ上手も使はず夜番せず 宵から出放大道を 按摩
針さへ当世は 笛でそれぞと知れかしの 杖に目がありや闇の夜に 鉄砲店もそゝり節
へ可愛い男の声はせで 蕎麦や按摩の声ばかり 此奴はちつとけんぴきを いふこえ暮
れて五百崎の 土手をぼっくり／＼たどり来る

「アゝ申し わしは通りの者ぢやが 連れの女が癩が起つて難儀します 何卒

療治してやつて下されぬか

「ムウ何ぢや 此土手で今時分療治してくれい 八八ゝやそぢや

へいとし可愛いの数々が 積ると書いて癩とやら 字は読めねども大方は 違ひ馴染の
女郎か 娘が下女か女房か 但しや乳母か何にせい 心中して死ぬ病人と 見てはとらね
ど聞きとつた 蘭八節でやらつなら へ手に手を鳥の 一ト声は 月が鳴いたか時鳥 冥土
の鳥とか云ふげなが これまでついしか極楽で 二人仲良う世帯して 暮らし候べく候
と言伝一つ状一本 何処へも来たる音沙汰は 内々どんな訳にせい 短気は損気ぢやコ
レナあるまいか

「トは云ふものゝ 若しやお前方は狐ぢやないか イヤ／＼其手では参るまい

へつまゝれぬうちドリヤ此処を 眉毛濡らして帰りましょ へほんに美し御手洗つゝじ
アレワサコレワサ 夜は開いて昼しほむ イヨサノサノ／＼ヤットコセ アレワサコレ
ワサ ヨイヨイへわしが思ひは塩屋の煙 アレワサコレワサ 仇な浮名が立つわいな イ
ヨサノサノサノヤットコセ アレワサコレワサ ヨイヨイ面白や へよい間に早くと歌
市は懐中押へて急ぎ行く

「お半覚悟しや

へ見つけれれじと手を取つて 乱るゝ雨の糸柳 帯の綾瀬の川浪に 二人が名をや立ち
ぬらふ。